

# 8

## 都市化と人間類型

——カイロ市井人の理想像——

はやし  
林

たけし  
武

はじめに【一部略】

I エジプトの都市化【略】

II カイロの変貌

III ナショナリズムの問題【一部略】

IV ムスリム同胞団【一部略】

出典 『現代アラブの政治と社会』研究双書221  
アジア経済研究所 1974年 第3章第1節

### はじめに

この小論は、カイロの都市化にまつわるさまざまな問題ないし問題塊のうちで、とくに同市の住民が都市化の過程で示してきた価値観の変化を、かれらが理想とみなす人間像の変遷においてたどろうというケース・スタディの一部である。

「私はベイルートものBayrūtiではない。イブヌ・ル・ダイア ibn al-ḡay'ah です」と辣腕で知られる同市の一実業家が語ったことがあって、ずいぶんと驚いたことがある。

イブンというのは「息子」の意味で、ダイアとは「豊饒な土地（のあるとこ

ろ)」から転じてレヴァント地方では農地・農村（とくに小村）のことである。直訳では「私のオリジンは農村<sup>むら</sup>の息子です」と言ったこの実業家の社会的系譜の表明には、中近東では随一と評されるコスモポリタンな（インターナショナルではない）この通商都市のまっただなかで、そして、このうえなく俗物的で物質主義的なベイルート市民の一人でありながら、農村出身であることに誇りをこめて語る心裏と、社会的には生れながらの都会人ではないことをもって善とする主張がひめられている。フェニキアらしいの商業民族などと性格づけられることの多いレバノン国民ではあっても（しかもそうした性格づけが不可能なのでも無効なのでもないが）、かれらが大都会に居住しようと、労働移民として国外に流出しようと、山岳部（Jabal Lubnān；これこそが本来のレバノンなのである）にある郷村との紐帯をすてはしないところに私の問題発見はあった。それは次のように展開してゆく。

国民の七割以上が農民であるエジプトでは、<sup>ファッラーフ</sup>農民 fallāḥ とは蔑称である。しかしながら、これはエジプトをトルコ人が支配していた時代の名残りであり、被支配者としての先住民全体に対する蔑称であった。訳をつければ「土百姓」とでも言うことになるであろう。だから、エジプト人たちは自国民をミスリー-Miṣri またはイブヌ・ル・バラド ibn al-balad と呼びならわしている<sup>(1)</sup>。とくに後者を自称するときには、いささかならぬ自負がこめられている。この熟語の後半部分バラドは、「町・村」ということの他に、ときには「国」を意味できる。しかし通例は「(大)都市・都会」のことである。それ故、「町（都市）の息子」とは「都市に住む者・典型的（上質の）都市居住者」の意味になる。この国の大都市に住む者は総人口からすれば少数派であるのに、かれらこそがエジプト人全体を代表しうるもの、とくに典型的ないし最上質のエジプト人とされているのは何故であろうか。

#### 【中略】

ともあれ、問題として提出されているものは、ベイルートの都市化・レバノンの社会変動、およびカイロの都市化・エジプトの社会変動という脈絡のなかでこそ正確には位置づけられなければならないところの、都市民の、自

覚史・自己主張そのものであるが、そこに、それぞれの国民社会の歴史的・文化的な特殊性が生きいきと脈うっていることは明らかである。

【後略】

## I エジプトの都市化【略】

### II カイロの変貌

#### 1. イブヌ・ル・バラド

オスマン帝国のエジプト占領時代を通じて（のちのナセル時代に至るまでである意味ではそうなのだが）、支配者のトルコ人にとってエジプト人はひとしなみにライヤra'iyah（隸民，物をいう家畜）であった。別には、ファッラーフ（百姓・土民）ということがエジプト人ということであった。それは、職業の如何ではなく、政治的・身分的に区別されたエジプト人の総称であった。これに対立するのが、パシャPashaとかベイBey (Bek) の称号をもつ貴族とエフェンディーeffendi (arb. afandi) とよばれる高官・貴紳であった。

アリー王朝いご，政府はエジプト人を多く軍務・行政に登用して権力の安定をはかった。とくに新興の農村ブルジョワジーがその要請に応じていったのであるが，かれらにしても，社会的系譜が違う豪紳たち，ザワートdhawāt（トルコ＝サーカシャ系）やアヤーンa'yān（トルコ＝エジプト系）とはっきり区別されていた。のちに，これら豪紳の地位が経済変動にあつてゆらぎ，農村中産階級が上昇してくるにつれて，両者の区別は当初ほどのものではなくなり，名門・名望家というほどの意味にまとまり，かれらは「ザワートの子供たち」awlād al-dhawātとよばれるようになった。もっと直截には金持の息子・娘たちという程の意味になっていった。

こうした上層での変化よりも先に，非特権身分であるファッラーフという

総称のなかで、第二の区別が生れていた。それがファッラーフに対立するものとしてのイブヌ・ル・バラド<sup>(6)</sup>である。

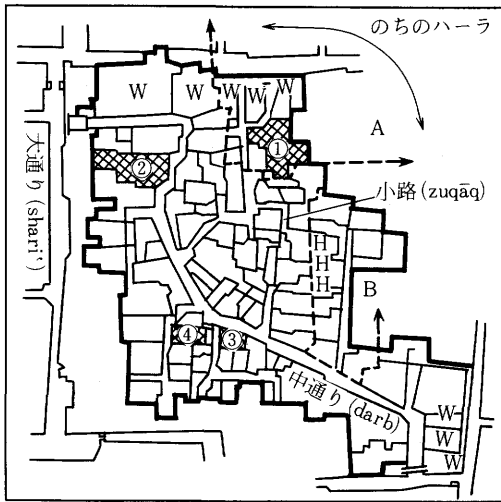
農民・地方住民に対する都市民、とくにカイロ市民の区別がこれにあたる。職業あるいは生業からすれば、都市民は非農業者であるから、商人・職人・その他が農民から自分たちを区別した自称であり、その心理には農民を見下したところがあるのは言うまでもない。

このイブヌ・ル・バラドの性格づけについて、18世紀末から19世紀初頭にかけての社会・政治史誌をのこしているジャバルティ<sup>(7)</sup> (1754~1822) の随所にみられるカイロ住民にかんする記述のなかにそれを探れば、およそ次のようにとりまとめることができるであろう。

(a)敬虔なスンナ派ムスリム、(b)生業に精を出すもの、(c)完全なカイロ言葉を話すもの、(d)外国人ではないこと、(e)古来の慣例と正しい礼儀作法をわきまえていること、(f)人情の機微に通じ義侠心に富むこと、(g)近隣を大切にすもの、等々を数えあげることができる。このさい貧富はあえて問われるところではないことに注目しておきたい。

(a)は、シーア派その他エジプトでは優勢でない宗派の者は土着の者とは見なされないということで(d)に通じ、(d)は、トルコ人でない者としての非特権者たちを意味していた。(c)は、カイロ下町の方言をさすもので、地方訛や外国訛の言葉を話すものを除外する項目である。(e)・(f)・(g)の各項と(b)とをつなげるところにジャバルティに代表される固有の観点=価値観がみられるのだが、とくに生業に熱心な者というところに市井の人びとのエートスが読みとれる。すなわち、生業(=正業)をもたないことは一人前の者ではないということであり、家族を扶養できないことを不名誉とする判断がそれに連続している。

ここで次に問題にしたいのは、近隣関係と古事・慣行に通じねばならないという項である。カイロの市民は、ただカイロに居住しているというだけでは社会的に承認されない。人がイスラームの信仰を告白することは必要条件であっても、特定宗派への帰属を証明しなければムスリムとしての十分条件



(注) 18世紀頃のハーラの一例  
 H：家屋 W：他のハーラとの境界になっている家で外側は塀になっている  
 1：浴場 2：ハーン  
 3：モスク 4：商店とコーヒー店  
 かつての大きいハーラはのちにA、Bのような小ハーラになっていった。

をみだしえなかったように、市民は信教(宗教)の別にしたがって、市中の特定地区に集住していた。そうした街区のことをハーラ<sup>クオーター</sup>ḥarahという<sup>(8)</sup>。ハーラの住民は非常に均質な行動・倫理・所得・服装で一色にまとめあげられており、各ハーラはそれ自体で完結した小世界をなしていた。こうしたハーラの集積がカイロであった。各ハーラには一種の中華思想があり他のハーラを見下しがちであった。ハーラ間の連絡は、取引関係と、共通の支配者を戴くということだけであった。

いかなるハーラにも属していないという者は、無宿者・無国籍者としての辱めに甘んじなければならず、無権利・無保護の状態におかれた。また貧窮のはてに乞食を余儀なくされても、それは不名誉なことではなく、したがってハーラから追放される理由にはならず、むしろ義捐を受ける自然権さえあるものとみなされている。こうした第一次社会集団でも成員間に不和や不祥事はさげられない。そういうとき、古事にならい、双方が納得する条件で説得し調停することこそイブヌ・ル・バラドの面目であった。また他のハーラと些細なことから対立することもある。とくに同じハーラの婦女が品位を損ねる言辞を浴びせられたとか、誰かが喧嘩沙汰をひきおこしたとかのさいに

は、ハーラ間に緊張がつのり、ときには集団的な実力の応酬ということになる。そういうとき、古くからの事件の数々とそれにまつわるエピソードを話してきかせ、相手方の気を鎮めとりなすのも立派な力量ならば、ついには腕力で相手をねじ伏せるのも「男らしい」行為futūwahとされている<sup>(9)</sup>。

とくに血気の若者の間にそうしたフトウワの組織がつくられていた。この組織は16世紀いらい幾たびともなく権力に叛いて蹶起の先頭に立ち、経済的危機や支配力の衰微に乗じて氣勢をあげている。ナポレオンが侵入してきたときも占領下でありながら知識人(宗教家)と大商人の指導の下にかれらは抵抗を示した<sup>(10)</sup>。

こうしたハーラは、各地区をつなぐ大きな通りshāri'(その両側には大商店がならんでいる)から分れた道が中通りになっていてハーラに入る。ハーラは二カ所に門をもち、内側は曲りくねりながらも、門から門へ通りぬけられる道darbと小路zuqāqと袋小路'aṭfahからなっていて、外来者には迷路に思える状態をなしている。プライベートは個人単位ではなくハーラ単位で守られる。夜には門が閉じられ警備の者がおかれた。

カイロは、当時、アル・アズハルの大寺院<sup>ḥiṣṣa</sup>の辺りを中心部に南北4キロ余、東西2キロにたりない北辺の長い台形をなし、市の西部を運河が通っていた。今日のオールド・カイロつまりフスタートFustātははるかな郊外であり、ナイル河にのぞむブーラクBūlāqは「外港」の町としてカイロ市内には入れられてなかった。

ナポレオンは占領時代に、行政的必要からカイロ全市を53のハーラに再編したが<sup>(11)</sup>、19世紀後半でも、カイロ市中は大小200ちかいハーラに区分されていた。19世紀初頭に20万以上の人口があったということにしても、各ハーラは算術平均でほぼ1000人を擁していたことになる。しかし、各ハーラはさらにサブ・ハーラshi'yākhahに分れていたらしく<sup>(12)</sup>、このサブ・ハーラが事実上はハーラとよびならわされるようになってゆく。

ムスリム以外のものは住まないハーラが前記の中の50以上を占めていたが、ハリファKhalifahとかザイナブSayyidah Zainabなどの地区は、今日でも

なお、昔ながらの典型的なムスリム庶民の地区である。

広義の行政的なハーラが多数の社会的なハーラに分れていたにもせよ、地区住民たちは聖女ザイナブやフサインという共通の聖者信仰で染めあげられている<sup>(13)</sup>。

各ハーラは市内に200余もあるという大小の寺院・聖人の墓をかれらの信仰と社会生活の地縁的な紐帯にしている。その信仰態度は、神学者の説くイスラームの教義とは一致せず、汎神論的な民間信仰の諸要素をもとりこんでいて、「願かけ」や「厄払い」の行事と不可分になってもある。これに加えて、日常の倦怠を吹きとばす楽しみが各種の宗教暦に即した祭礼の行事に重ねられることで、ハーラの生活は季節的なリズムを与えられる<sup>(14)</sup>。

## 2. イブヌ・ル・バラドとフトウワ

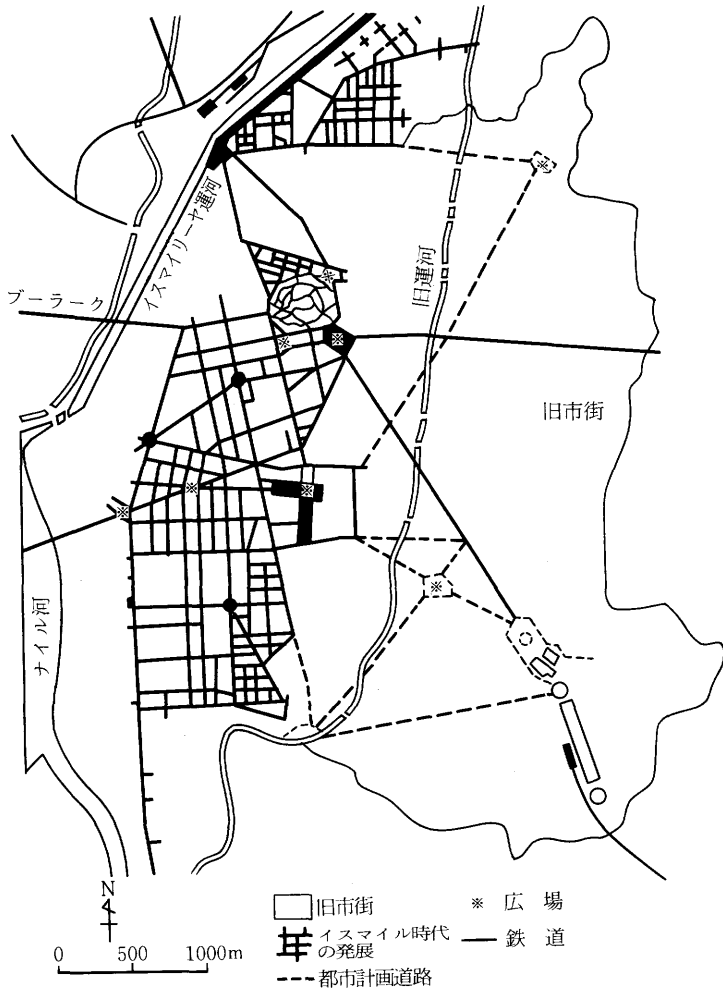
カイロの庶民世界は19世紀中葉から急に変化を示しはじめる。その理由の第一は、ギルドの凋落であり、第二はファッラーフの流入であり、第三は都市の膨張によるエコロジーの変化である。

ギルドの凋落は、ヨーロッパ産品との競争に敗北することの結果であり、通商圏・通商が大きく変わったことによるものであった。

カイロのギルドはハーラと重ね合せになっていた。たとえばガムマリーヤ Gammaliyahはシリア・イラクからの輸入品の市場であり、ハムザウィ Hamzawiはインドの絹・ヨーロッパのピロード取引に集中していたし、今日では観光資源化しているハーン・ハリリー Khān Khalīlīはトルコ産品に特化するバザールであった。スッカリーヤ Sukkariyahは砂糖（と菓子）の製造・卸・小売店が目白押しにならぶ場所だった<sup>(15)</sup>。

19世紀初頭には、12の大バザールに80のスーク、そして大小1300以上のギルドがあった。もっとも、1業種1ギルド(→1ハーラ)ということではなかった<sup>(16)</sup>ことが西欧との比較のさいには注意されなければならない点である<sup>(17)</sup>。にもかかわらず、ギルドはハーラにとっての物質的な基礎であった。それが

近代カイロの発展過程





崩れはじめたのである。

ギルドが政府の規制を蒙っているうちに外国人商人とその代理業者は、キャピチュレーションcapitulationという特恵の待遇を逆用して、商慣習になじまない仕方ではじめ、拡大して、既存の組織と倫理に決定的な打撃を与えた。列強の国際的地位と保護を背景にした外国人は、法と警察力の及ばない自由な集団として自由に営業し、場所も勝手に選択した。こうして在来産業とその組織の破壊者になったのはギリシャ人、マルタ人、イタリア人であり、その代行業者になったのがエジプトやレヴァントのキリスト教徒たちであった。ここに伝統的な生産と流通に緊縛されてきたカイロ庶民の外国人・異教徒に対する憎悪が深い根をはりなおす契機があった。

第二の理由、農民の都市流入は、農村におきた社会変化と19世紀中頃にあった農業不振の結果である。農村におきた変化は、人口増加と大土地所有による人口／土地の比率の悪化に原因をもとめなければならない。農業生産そのものは、しかしながら、順調に増加をしてきていたが、これは従前の自然利用の季節的灌漑から人工的な通年灌漑へと技術的に革新されたうえ、化学肥料も投入されるようになったからである。その経済的ピークはアメリカの「南北戦争」によってヨーロッパ市場で棉花価格が騰貴した時期であって、次いできた反落にエジプト経済も国庫も大打撃を蒙った。その負担をかぶった農民は離村して都市に流氓する。

かれらは、ムスリムが集中するハーラの外縁にはりついて都市細民となった。その間断ない流入が同一地方・同一村のものを一カ所に集積させることになり、その生活様式・住居(利用)の構造もまったく在村時代のものを再現したものであったから、都市の内部に農村化したエンクレーブができあがる。勿論この経済変動の過程で中産階級化するものもあったが、そうした連中は古いハーラから離脱していった。それは第三の問題にかかわる。

都市内社会の構造を変えた第三のものは、都市そのものの地理的な膨張で、新市街の形成という形で示されている。市の西辺をなす運河にそって、かつては、高官・貴紳の豪邸がならんでいた。また大商人の邸宅もあった。ある

大商人の邸宅の場合には、「その一家の女たちは生涯を通じて邸の外に出ることがなかった」（それほど広く一切の施設が私邸内にととのえられていた）ことをジャバルティは敬意をこめて、この一族の娘たちの名誉としている<sup>(18)</sup>。この一族は当主が死んだあと没落して邸宅は人手に渡り、大家族も分裂離散するという当時の変動を記録している。ジャバルティより半世紀おくれた頃のことをレーン・プールは「近頃のパシャ達は、マムルークいらいの名残りである古い邸をきらい、新しい（イスマイリーヤ）地区の……今様に安っぽい西洋館を好む。……だから昔の大ベイの御殿が中産階級商人のものになったりしている」<sup>(19)</sup>と述べている。

問題はこうした変動がハーラの生活にもたらすものにある。その第一は、ハーラの長老の<sup>シエイフ</sup>権威と役割の変化である。かれらはギルドの首長として相次いで創業する外国企業に労働力を供給してきた。それが、いまや農村からの流入人口が遊休していることで、かれらの世話にならなくとも安い労働力をふんだんに雇用できる<sup>(20)</sup>。古い権威と統制力はここで一挙に壊滅する。そのことが第二の変化をひきおこす。ハーラはもはやかつてのごとき単一の住民を包摂収容したものではなくってゆくということであり、かつてハーラがもっていた緊密な社会的結束は横丁や小路を中心にした小範囲の近隣に縮小・転化してしまったということである。18世紀までのハーラは、その中にモスクをもち、（公衆）浴場とコーヒー店をもち、外部との経済関係はハーラの入口の門の近くにあるハーン（商館）でなされてきた。そのハーンの意義と機能は、ギルドの変容と交通機関の変化にともない、しだいにうすれてゆく。他方、人口の増加は二階以上を道路に張り出す増築で補われるようになってもまだ住居がたりず、かつて倉庫であったところにも人が住むようになる。材質の故であまり耐用年数のながくない下町の建物は、こうして補修のいとまもなく需要があり、老朽化と荒廃が無残に進行させられる。

浴場の意味も、水売りが営業として成り立たなくなる頃、つまり水道事業が外国人会社の手で営業されるようになると、急に失われる。かくして、コーヒー店だけが町内の社交場としての比重を維持し、ときに拡大する<sup>(21)</sup>。レー

ンが詳しく報告しているように、コーヒー店は気のはらない社交・娯楽の場所として夜分には沢山の住民をあつめる。そこではシャーイルshā'irという義太夫語りに似た芸人が、楽器を携えて、音曲入りで連続ものの講談をきかせて人びとを楽しませる。人気があるのは英雄・豪傑の武勇伝と一族の名誉をかけた戦争の物語で、アブー・ザイドAbū Zaydやバイバルス王などがもつとも人気のあるヒーローであった<sup>(22)</sup>。

こういう物語が、かれらに正義と名誉と力への憧憬をかきたてている。そして、これこそがフトゥワfutūwah (男気・俠気・男らしさ)の培養基なのである。

庶民の英雄・理想的人格としてのフトゥワは、対立物としてのシャッタールshaṭṭār (単数はシータルshīṭar)とアイヤール'ayyār<sup>(23)</sup>とをもっている。前者はトルコ人高官の小姓・従者で、主人の外出のさい行列して威武を誇示するのが仕事である。だが反面、かれらは権力の威光をかさにきて庶民に対して横暴で、無理無体を押し通す権力悪の末端を人格化した存在であった。したがって、フトゥワの直接・当面の敵はこの種の悪党であったから、両者の抗争は間断することがなかった。ときにフトゥワの有力なものが大官に召しかかえられたともいう。

ギルドが崩れることで、それを基礎にしたハーラが崩れ、ハーラはしだいに小さい地区のこことになっていった。ハーラが小規模化して横丁zuqāqと同義語化してゆくに連れ、フトゥワは必ずしもハーラの社会生活に密着したものではなくなった。腕力の強い俠気のある若者を組織し確保するためには一定の範囲が必要であり、細分化し内部を多様化させつつあるハーラは、フトゥワの調達と組織化に必要な社会圏としては小さすぎるものとなりだしたのである。

この時点から「イブヌ・ル・バラド」はカイロ下町の庶民・細民のうちで、小さくなった近隣関係の中に埋没して有徳者・有識者というほどの意味で尊敬されるそれと、それから相対的に分離しやや広域の社会圏を遊弋して外部と上部に対抗する武断派集団とに、分解してゆく。しかしハーラ間の抗争や

喧嘩は19世紀中を通じてしだいに少なくなっていくた<sup>(24)</sup>。

### III ナショナリズムの問題

#### 1. フトゥワからバルタギーへ

イブヌ・ル・バラドは親代々からのカイロ庶民を意味しているけれども、かれらのハーラに地方から流入する者があっても、一定の意味と程度における適合・同化が認められるかぎり、新入者たちもイブヌ・ル・バラドとみなされる可能性は与えられていたといえることができる。

ところが、19世紀後半の都市化と工業化(アリーいろいろの国営事業による)の展開により、かつては「外港」であったブーラクBūlāqの町とカイロ市街とが統合されたあとになっても、ブーラク住民は、古い大きなハーラの住民から、イブヌ・ル・バラドとみなされることはなかった。それは都市化にまつわる工業化にかかわる問題であるが、ここではむしろ世俗化にかかわる問題をふくんでいる。

アリーがブーラクに港湾施設を整えて近代産業の導入を図り、旧ギルドの一部を移転させ、沢山の脱農者を雇用していったので、この地区は膨張しだし、やがて近代カイロの不可欠の部分にさえるのに、ブーラク居住者はイブヌ・ル・バラドの中に数えられはしないのである。このことは、イブヌ・ル・バラドの観念には、地縁と地縁にからむ信仰紐帯が重複して、歴史的に形成された社会圏を生活の場として生きる庶民の自己認識と自負がこめられている、ことを意味している。ブーラクには古くからの守護聖人のないことが思い合される。そしてまた、カイロ庶民に独特な「自由」の観念にもよるであろう。かれらは、他人の指示で労働しなければならないことを嫌うし、あらゆる規律と規則による拘束に馴染まない。それは、かれらがエフェンディーをふくむ官吏や兵士・工場労働者を見下す理由でもある。

地理的に膨張する一途のカイロにあって、昔ながらの下町として、ハーラは相対的に地歩を低下させている。そのことが、かれらをますます頑固な地縁論者たらしめ、保守的に自閉させてゆく、とみることも許されるかも知れない。

新しいカイロ駅が当時のヨーロッパ首府の中央駅なみに堂々たるものとしてできあがり、イスマイリーヤといわれる新市街区が運河の西・ナイル河の側に開発され、そこが舶来の装いをこらした近代的都市化の橋頭堡になってゆくの、ときに物見高くときには不快感をおさえきれずにみても、かれらを少数派たらしめる力を逆転させる術は、すでにかれらにはない。

イブヌ・ル・バラドたちの拠点の西、宗教的な少数派（人口の一割ほど）であったコプト（エジプト・キリスト教徒。かれらにもかれらこそが古代王朝いらいの真正エジプト人であるという強い自覚がある）<sup>(25)</sup>とユダヤ教徒の居住区に隣接して、しだいにその数をますヨーロッパ外交団・技師・商人のための街ができてゆく。エズベキーヤEzbekiyahの公園地区がそれであった<sup>(26)</sup>。いわば中世カイロの周辺部であった地区が、こうして新しいカイロの心臓部に転じ、壮大な都市計画の起点として、やがて現代カイロの中心部になってゆく。こうした1860年代の発展に拍車をかけるのが1882年からの英占領時代である。

工業化のためにイスマイリーヤ運河が開削されナイルの護岸工事がすすむと、旧市内のほぼ中央で南北に貫流していた大運河の洪水調整機能はもはや無用になり、埋めたてられてしまう。鉄道の開通が巨額の外資の投下をよび外国人の流入が堰をきったようになる。エズベキーヤの北、かつてはナイルの増水期の水がひかずに残って、沼のようであったあたりがもっとも華やかな商店街になり、南のアブティン宮に至る官公衙街とつらなる。

そうした帝国主義下のカイロを、赴任したばかりの英総領事クロマー Lord Cromer (Evelyn Baring, 1841~1917) は「人種のるつぼ」とみなしたものである。かれの眼にはカイロでもアレキサンドリアでもエジプト人が入ってこなかった<sup>(27)</sup>。

1905年になるとかれは誇らし気に次のように報告するのである。「……15年

もの昔を知るほどの人にならこの間の変りかたが一目瞭然であろう。かつてさまざまな工場が建ちならんでいた地区、紡績・織布・リボン製造・染色・テント製造・製靴・製鞍・研磨工場・香料加工・銅鍛冶・ふるい吹き・鍵屋などの群れていたあたりは、いまやそうしたものの跡かたもない。かつての栄華のあとには洒落れたコーヒー店やヨーロッパ風の小綺麗な店が新しくできてきている」<sup>(28)</sup>と。これほど卒直な英国の利益に合わせた占領行政の讚美もないのではなかろうか。

この時期にイブヌ・ル・バラドの観念にまた重大な変化がみられる。アハマド・アミーンの記述するところはこうである。

「イブヌ・ル・バラドとは、時代によってさまざまな内容をもつ言葉であるが、今日では、着衣・話し方・性格などで一般の人とは違った男たちのことを指す」として、柔らかな生地の長衣をまとい、それに合った色(明るい青・緑・茶)の胴着をきこみターバンをまいているという。指にはめている金・銀の指輪には小粒の宝石が埋められているし、美髯をたくわえ、剃りあとも青々と、爪にも手入れがゆき届いている。阿片を常用するので痩せていて体力がない。急ぎ足で歩き、ききとり難いささやくような口の利き方をし、特有の符牒を会話のなかに沢山とりこんでいる。また、暗喩を用いた軽口をたたいては鋭くわさびのきいた諷刺で会話を楽しいものにし、気のきいた地口で人を笑わせる当意即妙の応答が身上である、と言っている<sup>(29)</sup>。つまり、前世紀末のイブヌ・ル・バラドが、下町の伊達男になってしまったわけである。そのうえ、かれらには「定職がない」という指摘がある。

半世紀前のレーンの記述と比べてみると、「早寝早起き」で「働きもの」と称されたカイロ庶民の面影はすっかり消えて、小粋に気取った洒落者がイブヌ・ル・バラドということになる。「無職」者のかれらの生計は、大方、家賃収入でまかなわれていたらしい。農村人口の不断の流入がかれらを「定職のない」遊民にしてしまったのである。

それと同時に、かつてイブヌ・ル・バラドから分離したフトウワの大方がバルタギー-baltağiに転成してゆく<sup>(30)</sup>。フトウワが持っているハーラとの関係

がバルタギーの場合にはほとんどなくなってしまい、無法無頼の徒として非日常的な営為や犯罪、非法な取引にかかわってゆく。フトゥワとバルタギーとは完全に別個なものではなく、部分的には重複してもいたと思われる。

新しい中産階級が抬頭してきて「エジプト人のためのエジプト」を標榜する民族運動が19世紀末から始まるのだが、この時流にかれらは庶民の排外感情を代表するものとして、異教徒や外国人に対する暴力行為の先頭に立つ。かれらが国民政党史ワフドの院外団的に組織されていったのは言うまでもない。そして、その政治活動のピークが1919年のエジプト革命になる。その当時のかれらの活躍を、カイロ警察の責任者であったラッセル・パシャThomas Russel(1879~1954)は次のように記録している。「……大通りは有刺鉄線のバリケードで遮断され、これまでみたこともない悪形の暴漢の大群 a howling mob of the most horrible-looking roughsが旺んな氣勢をあげていた」<sup>(31)</sup>と。この時にはアズハルの神学生から農民まで幅広く底深くエジプト大衆が政治に参加したのではあったが、実行使の最前線にいたのは他ならぬバルタギーroughsであった<sup>(32)</sup>。

内政的には、議会制を要求するエジプト・ブルジョワジーの国民運動Hizb al-Waṭanが占領軍当局と政府から若干の譲歩をかちとったあと、政治運動が壁につきあたって停滞し、ワフド党と王朝諸派の対抗・ワフド党の分裂を経て政党間の争いが熾烈をきわめるようになってくると、民族的抵抗の尖兵として大衆煽動の口火をきったバルタギーたちは、今度は各政党の末端部分となって、自派候補のためにハーラの投票をとりまとめる役を引き受けるようになる。

【後略】

## IV ムスリム同胞団

### 1. 29年恐慌

モノカルチュアの国エジプトに大恐慌の影響はすぐさま表われたが、その回復の影響はなかなかこなかった。回復の影響は、第二次大戦の風雲がせまり英軍の中東補給廠がカイロにできることでやってきた。本稿の関係でいえば、そのことによって都市への流入者がさらにふえてきた。とくにブーラク地区の北となりシュブラー地区は新しい工業化の進展につれて主としてデルタ地帯の農村からの移住者の街となった。かつてこの地区はデルタ農村地帯に向うバスの始発・終着点であった。これと反対に、旧市街の南端に近いあたりは上エジプトから単身で上京してくる、主として家事労働者の集積地になった。そういうところでの居住利用や生活の様式は、デルタ(あるいは上エジプト)の農村がそのまま再現されたものになっている<sup>(35)</sup>。こうして、かつて大都会の小ハーラのなかにエンクレーブとなって拡散的に点在しながら進行した農村化ruralizationとはまるで規模も構造も異なるそれが1930年代から40年代にかけて進行した。

そのことがかれらの都市社会への適合過程を変則的なものにしていった。農村社会の部分的移転にも似たコロニーの形成は、新規流入者の一人ひとりにとって、緊張や困難を和らげ、都市社会への適合を容易ならしめた。だが反面では、徹底的な適合の妨げになったのもある。都市社会のなかで自立した個人になることよりは、自立した集団たる方向をたどりやすかった。とはいえ、それは可能なことではなかったから、かれらの都市社会での反応は集団的な反撥になりがちだった。

この点が、かれらをしてかれらの側からも旧いハーラの住民との間に距離をもたせてしまうのである。

そして、誠実なムスリムと自認するかれらにとってカイロの社会は、まこ



とに非ムスリムの・異国的な風土であった。かれらは自らの保守的な心情に気づくより先に、その異端的・外国的なモラルと風俗に憤慨する。村の社会では、相続した土地をもっていることが社会的な信用と名誉の基礎であり、誰もがその名誉と道義を損ねるようなことはしなかったし、できなかった。さまざまな人たちが「混在する」<sup>(36)</sup>都市は、名誉も信義も意に介さない頹廢と汚辱にみちた社会であるという性格づけをされることになる。とくに西欧化した金持たちの生活は、かれらにとって、国民的な屈辱でさえあった。

こういう都市社会批判を背景にした空前の社会・宗教運動がムスリム同胞団 al-Ikhwān al-Muslimūn の運動であった<sup>(37)</sup>。

この運動は、地方小都市の伝統主義的な宗教家の息子として生れた一小学校教員ハッサン・バンナ Ḥasan al-Bannā (1906~49) がイスマイリーヤ市に勤務中に創始したものであるが、かれの天才的な組織能力と情熱的な雄弁に加えた不断の活動が時勢に対して大衆が抱く素朴な批判と根強い不満を先取りして、1940年代には一大国民運動として政治に重要な影響を及ぼしうるほどのものに発展した。

#### 【中略】

カイロに転動してきたバンナは、庶民の住む地区である新ヒルミーヤ地区に住み、人の多く集まるコーヒー店で法話を説きアジを繰り返した。かれの運動の信奉者になったのは青年・学生・小商人などであったが、さまざまなデータから推して、その積極的な活動家層は都市に流入してせいぜい二世代までの人びとであった、と私は考えている。

都市に流入してきた人びとの適合過程の問題はこの節の冒頭でふれた。いまやその人びとが全面的に正当化されているのである。もっとも、かれらばかりが「同胞団」の主力だったのではない。しかし、バンナの運動にもっとも敏感な共鳴装置を社会的にもっていたのは、かれらであった。

田舎で旧式な教育をわずかに受けたにすぎないかれらは、リベラルなイスラーム改革論の系譜とは違ったところから、伝統的な(そして権力にとりこまれ現状肯定的になっていた)知識分子の<sup>フアラマニ</sup>社会観と宗教観を攻撃した。そして運

動の広がりや昂まりに比例して、かれらとは違う宗教(=人倫・社会・国家)観をもつものに不寛容になってゆく。

その照準が合わされていったのは英占領軍であり、異教徒放逐の「聖戦」のために「同胞団」は武装闘争の準備をすすめる。ここでまた都市の最底辺住民をつつみこんだ排外主義としての「同胞団」運動は、異教徒の無法に対するフトゥワの存在と交錯することになる。

遊俠の徒も義挙するときがきたとの意識をもつことができるし、いまや真正のイブヌ・ル・バラドたるかれらの本然の姿への期待がもりあがる。こうして都市住民は結集された。しかし、「同胞団」の軍事組織がまことにきわどい性格をもっていることには変りはない。

そして、その問題が間もなく露呈されてくる。ハーラの住民たち、イブヌ・ル・バラドの日常の顔はつねに「自由」にむけられている。かれらの名誉としての自由は、強制を拒み、統制に馴染まぬところにこそあるとされる。だから反権威的で反政治的なのもあった。そして反組織的でもあった。

こうしたルーズな行動原理が、情緒的に昂ぶってくる同胞団のフトゥワにとって、度し難いものと映ずるのも自然である。無辜の庶民はかくして自らの正義感の故に権威主義化してゆく「同胞団」のフトゥワの攻撃にさらされることになる。一見したところ、民族闘争の前面に華々しく登場した「同胞団」が、庶民のなかでは存外な反撥を今日に至ってもなおもたせている理由はここにあるといわねばならない。さきに引用した【省略部分—編者】マフーズの作品『わが町の子ら』*Awlād al-Hārāh-nā* (1967)<sup>(38)</sup>は、こうした点での「同胞団」を描いたものと評価されている。

「同胞団」の崩壊は、その組織方法の弱点の故とされたり(ナセルの論評)<sup>(39)</sup>、バンナというカリスマ的指導者を失ったことや、また誤った武装蜂起論にその責を帰されたりするのが普通である<sup>(40)</sup>。また、「同胞団」運動は中産下層の都市住民のファッション的な体制批判とみなされもするが、それらは何れも重要な一点を見落としているとしなければならない。それはこの運動がもともと地方人(農民)的な価値観と発想に根ざすものであったこと、都市

移住後の一～二世代のものが強力な支持層であった、という点であるが、この二点に正当な注意を払ったものはほとんどない。

ガマル・アブド・ヌ・ナセルを指導者とする「自由将校団」の革命（1952年）は、一切の政党の活動を禁じながら「同胞団」だけは温存した。自由将校団員の多くは農村の手作り地主層・下級官吏の子弟であった。かれらの思想世界は決して近代的なものではない。ましてや西欧的なものではない。むしろ地方に土着の伝統主義的なムスリムのものである。その意味で、かれらの思想体質には理念としての水平主義と性格としての権威主義が深く根を下ろしていて、西欧的・近代的なものを渴望しながらもそれを所有しているものに対する猜疑と警戒を弛めることがない。それを人格で体現していたのがガマル・アブド・ヌ・ナセルその人であった<sup>(41)</sup>。

【後略】

## 2. むすび【略】

〔追記〕

この小論の方法ないし問題発想は、表題が予想させるところと違って社会学的なものでもなければ歴史学的なものでもないであろう。かといってまた人類学的でもなく、いわゆる「東洋学」のそれでもあるまい。

むしろ、それら諸学の成果に扶けられた「地域研究」Area Studiesの試みである、と筆者は意識している。けれども、この「地域研究」なる用語も外来のもので、あるときは「アメリカ文明」研究と同義であり（そういうものとしてこの用語は戦後すぐ日本に導入されてきた）あるときには人類学や地理学の方法ないし一分野とみなされたりもしているのが現状である。にもかかわらず、私は、自国の文化・社会と対等の価値をもつ任意の一外国の文化と社会にかんする研究、つまり外国研究の方法態度というほどの意味でこの用語にこだわっているし、それだけの意義も理由もあるものと考えている。ここはその詳細を論ずる場所ではないが、アジア・アフリカ等にかんする研究が任意の一地域（ときには一部落さえある）の「歴史と言語」にかんする研究に矮小化されることへの反駁をこめて、私は「地域研究」論をもっている。他方ではまた、既存の専門科学の方法装備と発想とを反省することなく、ただ対象地域をパン・アトランチック地域から

地球大の規模に拡大するにとどまる、いわば社会科学を地球物理学化する学問動向にも批判的たらざるをえない者の、思いは高くとも、手元の不確かな成果がこの論文である。この論文のよしあしについては読者の評価に委ねる他ないが、それと「地域研究」のもつすぐれて現代的な意味とは混同しないで頂きたい。

「地域研究」についてかつて紹介したものと手短かにまとめたものがある。関心をもって頂ければ現代のアジア・アフリカ等の研究に従っている者にとって激励になると思う。

- ハミルトン・ギブ「地域研究の再検討」1・2（『みすず』1966年2月、4月号）  
 拙稿『現代地域研究論』（69年）アジア経済研究所（所内資料43-48）  
 拙稿「“地域研究”論によせて」（東外大AA研『通信』8号、69年12月）

[注] \_\_\_\_\_

- (1) エドワード・レーンは、19世紀前半にエジプト社会についての報告で、エジプト人は、われわれがいまここで用いたのと同じ仕方で自分たちのことを呼んでいることを記している。Edward Lane, *The Manners and Customs of the Modern Egyptians* (1st. ed. 1835), Every Man's Lib. (1954 ed.), p. 27. & n. 1.2.3.4.
- (6) この用語が何時からあるのか分らない。一説によると12世紀頃からの文献にあるというが私には確かめられなかった。
- (7) 'Abd al-Rahmān al-Jabartī, 'Ajā'ib al-āthār fi-l-tarājim wa-l-akhbār, Būlāq-Cairo, 1297 A. H. 1880. なお, Sawsan Mahmoud el-Messiri, "The Concept of Ibn al-Balad" (mimeo) [1970] AUC. MA. Th.,によれば, ジャバルティのawlād al-balad, ahl al-baladは同義語であって区別されるべき内容ではない。この論文に私も負うところが少なくない。が、この論文の優れたところは数年をかけたフィールド作業にあり、ジャバルティの引用や底本問題その他には疑問がある。また有名な仏訳本Cheikh Mansour et al., *Merveills biographique et historique*, Le Caire, 1888-90, 9 vols.は本稿の目的には役立たない。
- (8) ハーラに関するヨーロッパ語の文献は少ないが、ここでの関説からは、次のもののなかにある記述は重要である。

André Raymond, "Quarties et mouvements populaires au Caire au XVIII<sup>eme</sup> siècle" in *Political and Social Change in Modern Egypt*, ed. by P. Holt, London, 1968, pp. 103-116.

Gabriel Baer, "Social Change in Egypt, 1800-1914" (*ibid.*, pp. 135-161).

do: *Studies in the Social History of Modern Egypt*, Chicago, 1969.

do: *Population and Society in the Middle East*, London, 1960.

Janet Abu-Lughod, *Cairo*, Princeton, 1971.

だが何れも断片的である。

- (9) 前出A. Raymondの論文の他にJacques Berque, *L'Egypte, impérialisme et révolution*, Paris, 1967; do: *Les Arabes, d'hier et demain*, Paris, 1960を参照されたい。
- (10) Al-Jabartī, *op. cit.*, Vol. 3, p. 4ff.
- (11) J. Abu-Lughod, *op. cit.*, p. 71.
- (12) G. Baer, "Social Change……," p. 146.
- (13) ハーラと聖堂との関係はムスリムにのみかぎられるものではなかった。19世紀中葉のカイロに約5000人のユダヤ人がいて八つのシナゴグをもっていたという。レーンによるかぎりかれらの居住区は一つであったらしいから、内部で八つ以下のサブ・ハーラに分れていたものかも知れない。他の地区に比して著しく道幅がせまく人口稠密であったらしい。
- (14) E. Lane, *op. cit.*, Chaps. 15-16. なお、ついでながら、同書の邦訳(『エジプトの生活』大場正史訳, 昭和39年)は抄訳であって、ここで参照すべきところが収められていない。
- (15) J. Berque, *L'Egypte*……, p. 64ff.
- (16) 'Alī Mubārak, *al-Khiṭaṭ al-tawfiqīyah al-jadidah*, Būlāq-Cairo, 1888-9, Vol. XII, p. 134.
- (17) 近ごろギルドの存在を否定する議論があるけれども(A. Hourani ed., *Islamic City*, Glasgow, 1970), これは、ヨーロッパを標準にした議論なので、ヨーロッパ風のギルドがなかったと主張するにとどまる。本格的に否定するのならギルドの機能がまったく別のもので果たされていることを立証しなければならないはずである。論点はやや異なるがアブー・ルゴドの既存研究批判、とくにI. Lapidus, *Muslim Cities in the Later Middle Ages*, Cambridge, Mass., 1967.をみよ。cf. J. Abu-Lughod, *op. cit.*, p. 72; Mubārak, *op. cit.*, Vol. XII, p. 134.
- (18) Al-Jabartī, *op. cit.*, Vol. I, p. 204ff.
- (19) S. Lane-Poole, *Cairo*, London, 1892, p. 124.
- (20) G. Baer, *Social History*……, p. 149ff.
- (21) コーヒー店の意味と役割については、前出レーンの他にベルク(J. Berque, *Les Arabes*, Paris, Sindbad, 1973), ベア(G. Baer, *Population and Society*……)でも言及されている。
- (22) E. Lane, *op. cit.*, Chaps. xxi-xxiii (pp. 397-403).
- (23) フトゥワとシャッタールとをこのように区別してみたのだが、アイヤールについてはこの用法と逆の場合がジャバルティにある(*op. cit.*, Vol. II-13, III-331, 335)。なおさまざまな例についてはA. Raymondも論じている(*op. cit.*, p. 111をみよ)。

- (24) Mubārak, *op. cit.*, Vol. II, p. 84.
- (25) コプトは封建時代いらい徴税官その他として権力に雇われてきていたが、ムスリムからは第二級市民視されがちであった。資本主義化の過程でかれらは農民や庶民の恨みをかう中間業者・代行業者として活躍した。他方、エジプト人が政府に登用されるにつれて、既得権益をめぐる対抗関係も激しくなった。こうしたことが民族主義運動の昂まりのなかで、一時はできた超宗派的な国民総路線が、ワフド党結成以前にコンミュナルな分裂をうんでいる。
- (26) 1868年パリの万国博に招待されたケディーヴのイスマイルはオスマンによるパリの都市計画に感銘し、カイロの都市計画を構想する。
- (27) これ故にクローマーはながらく「純粹のエジプト人」なるものがあるとは思わなかったし、エジプトに民族主義が抬頭するなどと考えることもできなかったのである。
- (28) *Rapport de Lord Cromer sur l'Egypte et le Sudan pour l'annee 1905*, Cairo, 1906, p. 117. なおE. Burnes, *British Imperialism in Egypt*, London, 1938をみよ。
- (29) Aḥmad Amin, *Qāmūs al-'ādāt wa-l-taqālīd wa-l-ta'ābir al-miṣriyah*, Cairo, 1953にあるイブヌ・ル・バラドの項より (pp. 6-8)。
- (30) バルタギーはバルタbaḷḡah (斧) に由来する。もともとは屈強な王室工兵のことであった。かれらがしばしば暴行を働いて良民を困らせたのだった。
- (31) Sir Thomas Russel Pasha, *Egyptian Service, 1902-1946*, London, 1949, p. 144. なおまたpp. 202-203.
- (32) エジプト政治とバルタギーの関係についてはP.J. Vatikiotis, *The Modern History of Egypt*, London, 1969, p. 330ff. にも関説されているが、かれは工場労働者地区シュブラーをnative quarterとしている点では筆者と見解を異にする。ブーラクの北に位置するこの地区は「貧しい」地区ではあっても旧ハーラーとは違って(未)熟練の産業労働者の居住地区であり、生活感覚に旧ハーラーとは同じくできないものをもっている。後の部分で、そのことにふれることになる。
- (33) J. Abu-Lughod, "Migrant Adjustment to City Life, The Egyptian Case," *American Journal of Sociology*, Vol. 67, 1961-2, p. 22ff. のちにChurchill et al. ed., *Readings in Arab Middle Eastern Societies and Cultures*, The Hague, 1970.
- (36) こうした農民の都市(民, 生活)に対する態度についてはH. Ammar, *Growing Up in an Egyptian Village*, London, 1954をみよ。
- (37) 「ムスリム同胞団」についてはわが国にも論文が多いので、ここでは最新の研究書を追加するだけでよいと思う。R.C. Mitchell, *The Society of the Muslim Brothers*, London, 1969. またバナナの著作には『ムスリム同胞団の使

- 命』(池田修訳, アジア経済研究所所内資料, 1969年)がある。
- (38) この作品に対する政治史家の分析には次のものがある。P.J. Vatikiotis, "The Concept of Futuwwa, a Consideration of Despair in Naguib Maḥfuz's *Awlād Ḥārah-nā*," *Middle Eastern Studies*, May 1971, pp. 169-184.
- (39) ナセル『革命の哲学』(西野訳, 平凡社), サダト『ナイルの叛乱』(井上訳, 岩波書店)を参照せよ。
- (40) M.I. al-Ḥusaynī, *al-Ikhwān al-Muslimūn, Kubrā al-Ḥarakah al-Islāmīyah al-Ḥadīthah*, Bayrūt, 1956 (Tr. F. Brown et al., *The Moslem Brethren*, Beirut, 1956)がその代表例である。
- (41) ここでも最近の文献のみをあげる。林武『ナセル小伝』日本国際問題研究所, 1973年およびR. Stephens, *Nasser, A Political Biography*, London, 1971.

(林武/執筆時: アジア経済研究所調査研究部主任調査研究員, 現: 大東文化大学国際関係学部教授)